

73

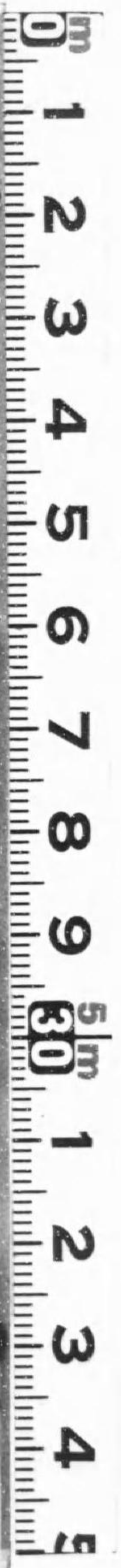
275
8

特 220

25

日本女性の道

小倉鏗爾著



始



道



東 京
錦 正 社 刊



自序

女性が悪くなると、男性も悪くなる。女性が腐ると、男性も腐る。まことに女の力は偉大であります。女のために悪事を働く男や、女のために身を過る男は、世間に餘りに多いのであります。その反對に、立派なる女の力によつて、立派なる男の行ひが生れ、美しい女の心によつて、美しい男の仕事が生じた例も、また頗る多いのであります。女性が男性を支配する力は、意想外に大きく、大は一國の盛衰に關係し、小は一家の浮沈に

關係します。女は、男に及ぼすその力の頗る大であるがゆゑに、その責任の重大であることを、よく自覺せねばなりません。

由來、わが日本の女性は、堅實なる女性の標本として、世界に誇るべき美風を有してゐます。私は、敢て時勢を無視して、日本の女性を、古き世界にのみ閉ぢ込めておかうとは思ひませぬ。時代に應じて、女性の進むべき道も、自ら變つてゆくべきものであります。けれども、その道の根本においては、昔も今も、また未來も、一貫して變りません。では日本女性の根本た

るべき道とは何んでありませうか。それは、男性と共に、力を合せて、忠を行ふことであります。即ち、忠を行ふ方法は、時によつて異り、また男女によつて異りますが、忠を行ふこと、そのことは、日本の男女共通の萬世不變の道であります。

本書において私は、主として以上のことを説くのを目的としました。説いて足らざること、なほ説くべきことも多々ありますが、平易簡明を主としましたので、この大要をお話するにとどめました。私はわが親愛なる日本女性が、眞に日本女性とし

て、新鮮しんせんに、明朗めいろうに、潑刺はつらつとして、日本女性にっぽんぢよせいの道みちを進すすみ、以もつて
 萬邦無比ばんぱんむひの皇國くわうこく日本にっぽんの精華せいけわを、いよく發揮はつぱいすることに貢獻こうげんせ
 られんことを切望せつぼうしてやみません。

昭和十二年六月十三日深更

小倉 鏗 爾

日本女性にっぽんぢよせいの道 目次

第一、世界一の國家・世界一の國民・世界一の女性……………(一)

第二、皇室・皇國・皇道……………(10)

第三、神ながらの道……………(11)

第四、祖先崇拜……………(13)

第五、家……………(17)

第六、血 筋……………(21)

第七、國 體……………(25)

第八、皇室と臣民……………(27)

第九、日本の女性は何んとしても日本の女性……………(44)

第十、日本女性の道の根本……………(49)

第十一、愛が本……………(五三)
 第十二、教育勅語……………(五七)
 第十三、天 職……………(六一)
 第十四、結 婚……………(六六)
 第十五、愛と平和……………(六九)
 第十六、勇 氣……………(七〇)
 第十七、貞 操……………(七八)
 第十八、職業(労働)……………(九二)
 第十九、日本女性の健在を祈る……………(一〇〇)

— 目次終り —

日本女性の道

小 倉 鏗 爾 著

第一、世界一の國家・世界一の國民・世界一の女性

日本は、世界一の國家であります。随つて日本國民も、世界一の國民
 であります。又た随つて、日本國民の半數を占める日本女性も、世界一
 の女性であります。

日本は世界一の國家、日本國民は世界一の國民、日本女性は世界一の

女性。これは決して自惚れでもなく、誇大妄想でもありません。なるほど日本よりも領土の大きい國は澤山あります。英國、米國、佛蘭西、露國、支那、伊太利など、日本よりも遙かに廣大な國であり、その他に、まだ澤山あります。又た日本よりも人口の多い國は澤山あります。更に又た日本よりも富める國は澤山あります。それにも拘らず、日本が世界一であるといふのは、何ゆゑでせうか。

皆さまは、『古事記傳』(古事記といふ日本の歴史を書いた一番古い本。)といふ書物を書いた徳川時代の有名な本居宣長といふ大學者を御承知でせう。この人の書いた本で『玉くしげ』といふのがあります。その中に、

およそ物の尊卑美惡といふものは、その形の大小によるものではない。それで、國もいかほど廣く大きくとも、卑しく悪い國があり、狭くて小さくても、尊く美しい國がある。

と云つて、そして、わが日本こそ、世界で一番尊く美しい國であると説いてゐます。かういふ説は、ひとり本居宣長に限りません。眞に日本のことを、よく研究し、よく見きはめた學者は、みんな日本は世界で一番尊く美しい國であると云つてゐます。日本といふ國をよく研究もしないで、外國の學問ばかりをしてゐると、外國の物事がすべてよく見えて、外國盲拜、外國かぶれになり、自分の國でありながら、日本のことは、

すべてつまらないといふやうな考へになつてしまひます。昔は學問といへば、支那の學問のみだと思つてゐたので、支那かぶれをした學者が澤山出て頗る間違つた思想がはりました。また明治になつてからは、盛んに西洋の學問が入つて来て、學問をするといへば、西洋の學問をすることだと考へるものが多く、それがために西洋かぶれした學者が、澤山出ました。支那の學問も、西洋の學問も、すべて大切なものであります。支那や西洋や、また印度の佛教の學問のおかげを多く蒙つて、日本といふ國は、今日のやうに進んで來たのであります。しかし、自國の基（即ち國體、このことは後に説明します）に害になるやうなことでも、かま

はずに採り入れるといふことは、絶対にいけません。それで、支那の學問について、大昔に菅原道眞公は、

支那の學問と教へは、大變によいけれども、わが國の風に合はない點もあるから、それを注意せねばならぬ。どういふ點が合はないかといふと、革命といふことである。

といふやうに云はれました。それは、支那では、皇帝になる人は、天命によつてなるのであるといひます。天といふものは、空々漠々、形も何もないものですが、さういふ天といふものが一番尊い、その天が徳のある人を選んで、皇帝にするのである。そして、もし皇帝に徳がなけ

れば、天は命令を革めて(改め)他の徳のある人に皇帝になるやうに命ずるといふのです。それで支那では、天子が變り、國が改まることを革命といひます。つまり、天の命令が革まつたといふ意なのです。けれども天の命令といつても、天は形もなく、何もない、口もきません。つまりは、人々が力づくなどで、皇帝を討つたり、排斥したりして、そして勝つた人が皇帝になるといふわけです。さういふ思想が支那の學問には入つてゐるから、その點は絶対にいけない、よく氣をつけなければならぬと、さう菅原道眞公は云はれたのであります。大昔に、さういふことを云はれたのは、いかに公が、日本のことをよく知つてゐられたか、わ

かります。外國の思想、學問などは、一概にいけないと云つて、排斥したりするのは大間違ひですが、日本の國體に合はぬことまで入れて、それにかぶれるやうになつては大變であります。赤い思想といふのもそれであつて、それは日本の國體に合ひませんから、さういふ思想にかぶれるやうなことがあつてはいけません。

お話は、もとに戻り、日本は國は小さくても、本居宣長先生の云つてゐらるゝ如く、尊く美しいこと世界一なのであります。そのわけをお話する前に、皆さまにお尋ねして見たいことがあります。それは、皆さまは、今こゝに日本は世界一であると申し上げたのに對して、どういふ

感じをお持ちになりますか。さうだ、日本は世界一である、どこの國よりも優れた立派な國であると感ぜられますか、それとも、日本が世界一などといへない、日本はいやな國であると感ぜられますか。私は十人の中で恐らく十人までが、日本は優れたよい國である、世界一であると、お考へになつてゐることゝ信ずるものであります。日本國民であり、日本女性である以上は、さうお考へになるのが、當然であり、それでこそ本當の日本人、本當の日本女性なのであります。もし、不幸にして、日本はいやな國だなどゝ考へる人があつたならば、その人は、非常なる認識不足、大なる考へ違ひをしてゐるのであつて、日本の如き世界一の有

り難い國に生れて來ておきながら、その有り難さを知らない罰當りであると云つてよろしいのであります。それはたとへたならば、太陽の恩恵を忘れてゐるやうなものであり、空氣の有り難さを感じないやうなものであります。太陽の光りや、空氣は、いつでも與へられてゐます。殊に空氣は、一瞬の絶え間もなく與へられてゐますので、空氣の有り難さを感じて人はすくないのであります。又た太陽は、晝間天氣が好ければ照り輝いて、私達人間を初めあらゆる物に生氣を與へてくれます。この太陽の有り難さをも、餘り感じない人が多いのであります。しかし雨天が幾日もつゞいたり、地下やその他の日當りの悪い場所にゐたりしたとき

は如何に太陽の光りを求め、如何にその光りが有り難く感じられること
でせう。何事でも、狎れると有り難く感じなくなりす。これと同じく
日本の如き世界一の優れた立派な國に生れて來ても、空氣が常にある如
く、國家の恩恵が常に私達の上に垂れてゐるので、殆んどその有り難さ
を感じないのであります。感じないどころか、反對に、不平不満の心を
起して、自分の國を悪く云つたりすることになります。これは大變なる
心得違ひであります。

第二、皇室・皇國・皇道

では、何故に、日本は世界一の國家でせうか。それは、萬世一系の天
皇様(皇室)がましますから、世界一の國であるといへるのであります。
いかに、廣大な國土をもつてしても、いかに、巨大な國富をもつてして
も、その他、いかなる努力をしても、萬世一系の天皇様(皇室)は、人爲
的に作ることはできません。世界無比の萬世一系の天皇様がましますか
ら、日本といふ世界一の、世界無類の、立派なる國家があるのでありま
す。

世界には、大小多くの國があります。それらの國々は、皇帝があるか、
或ひは大統領を置くか、何かの方法で、國を治めるために、一番の首腦

者があります。皇帝（又は國王）のある國を、世間普通には君主國といひ、大統領を置く國を、世間普通には共和國（又は民主國）と呼んでゐます。そして今までは、わが國には、天皇様といふ君主がましますので、やはり君主國であるとされてゐました。至つて大ざつばな考へからいへば、外國の皇帝（國王）のある國も、わが天皇様の御國たる日本も、同じく君主のある國ですから、一樣に君主國と云つてよろしいやうであります。けれども、同じ君主といつても、その性質、その成り立ちが、わが天皇様と、諸外國の皇帝とは、全然異なるのであります。ゆゑに日本をたゞ君主國と云つたのでは、日本國の本當の性質を現はすことはできません。

日本は天皇國であり、略して皇國といふべきであります。

天皇様の御家を、皇室と申し上げます。詳しくいへば、天皇様を家長とせらるゝ皇族様方全體の御家を、皇室と申し上げます。ゆゑに皇室と申し上げれば、天皇様をもその中に御含みして申し上げます。になりすから、以下、皇室といふ語が出たときには、そのおつもりで御讀み下さい。さて皇室の御祖先のことを、皇祖皇宗と申し上げます。これを分けて説明すれば、皇祖は天照大御神様であります。皇宗は御代代の天皇様の御事であります。それで單に天皇様と申し上げますと、皇祖様と皇宗様と今上陛下と、この御三つを御一體（御一）と見て申し上げます。

語なのであります。皇祖天照大御神様から御代々の天皇様は、數多くあらせられますが、みな御一體・御一心であらせられます。みな天照大御神様の御延長で、一系連綿、天壤無窮に御續きになる唯一の天皇様であらせられます。即ち、天照大御神様の御直系御正系(まつすぐ正)の御子孫が御代々の天皇様で、その御行ひ遊ばされることは、天照大御神様の御遺訓通りなのであります。御遺訓とは、御残しになつた御教へといふこととであります。かく皇祖の御遺訓通りに、御代々の天皇様は、この日本國をしろしめす(御統治・御治め遊ばさる)のでありますから、皇祖皇宗の御遺訓と申してもよろしい。本は皇祖の御遺訓で、御代々の天皇様、

即ち皇宗が御踐み遊ばされ、御行ひ遊ばされたのですから、皇祖皇宗の御遺訓であります。されば教育勅語には、

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所と仰せられてゐます。子孫臣民とはどういふ御意味で仰せられたかといひますと、こゝに仰せられた子孫とは、皇室の御子孫のこととあります。即ち、將來天皇様におなり遊ばされる御方を初め、皇族様方の御事であります。臣民とは申すまでもなく、我々及び我々の子孫のこととあります。それで、皇祖皇宗の御遺訓は、その御子孫にまします天皇様や皇族様の御方々も、また我々臣民も我々の子孫も、ともにみな永久に遵守

るべきものであると仰せられたのであります。

皇祖皇宗の御遺訓は、かくの如く、皇室におかせられても、また我々臣民においても、永久に遵ひ守るべき道でありまして、皇道とは、この道のことをいふのであります。即ち天皇様の道を皇道といふのであります。いひかへれば、皇祖皇宗の御遺訓でありますから、皇祖皇宗の道を皇道と云つてもよろしい。つまりは天皇様の道なのであります。そして皇道を明かに御示し遊ばされてゐるのは、教育勅語であります。ゆゑに『皇道とはどんなことか』と問ふ人があつたら、『教育勅語の御教へが皇道である』と答へればよろしいのであります。

皇道は、かくの如く、天皇様の御道でありますから、私達國民は、この皇道を遵守し、奉體（行）せねばなりません。なぜならば、天皇様の御行ひ遊ばさるゝ所、天皇様の御教へ遊ばさるゝ所、それが天皇様の御道即ち皇道でありますから、國民は、男も女も何人も絶対に皇道を遵守し奉體せねばならないのであります。わが國にはいろいろの宗教があり、先づ佛教が一番多く廣く行はれてゐます、その佛教にも、いろいろの宗派があり、また基督教もあります。それから宗教神道もいろいろあります。これには十三派もあります、黒住教、天理教、金光教、大社教などいふのがそれです。かういふやうに、各種の宗教があつて、それく信

者があります。これらの宗教のどれかを信じて、善い人になるやうにつとめるのはよいことです。しかし、どの宗教の信者でも、皇道だけは、みんなが遵守し、奉體せねばならぬ道であります。皇道は、天皇様の御教へを奉じる道ですから、誰でも奉じねばならぬのであります。

また、いろくくの宗教の他に、いろくくな道を説く教へがあります。さういふ修養の道を聞いて、善い人になるやうに努めるのは、まことによいことで、ますくさうありたいのであります。けれども、その善い人になるのは、つまりは皇道をよく奉體(行)する人になるのが目的であります。いひかへれば、教育勅語の御教へを踐み行ふ人になることが、

目的なのであります。ゆゑに、すべての宗教も、すべての道も、すべての修養も、みんな歸する所は、皇道を奉體する人になるためのものであります。それで徳富蘇峰先生も、

されど我が皇道は、苟も(かりそ)日本臣民(日本國民)たるもの、絶對的に
遵由(たがふ)せねばならぬ大道にして、凡有る宗教者も、否宗教者(宗教を信
人)も、將た如何なる異說者(意見のちがひ)も、皆な此の道(皇)の軌道、範圍
より外るゝことは出來ない。

といはれ、また、

それで日本は色々他國の眞似をして來る。けれども萬種一本(いろくくも

本に) 皆一に歸する。短簡に歸する。明白に歸する。一本道に歸する。その一本の道が私の申した皇道である。その一本の道(皇)に我々が一致して行くことが、即ち舉國一致である。

と云つてゐられます。全くこの通りで、いろ／＼の方面から説く教へや道はありますが、歸する所は皇道なのであります。歸するところ、つまるところ、もし皇道に反するやうな教へや道であるならば、それは、悪い教へであり、邪まの道でありますから、さういふ教へや道に従ふことは、絶対にいけません。

第三、神ながらの道

皇道は、天皇様の御道で、わが國唯一の根本の道であつて、私達國民のすべては、この皇道を奉體せねばならぬことは、以上でそのあらましをお話しました。

ところが、わが國唯一の根本の道として、神ながらの道(神はカム又はカンと讀んでもよろしい、また漢字ばかりで書くと惟神道とか隨神道とかと書きます)といふ言葉が用ひられます。この神ながらの道を略して、神道(道はタウとにござらずに云ふ)とも云ひます。神ながらの道の『ながら』

とは、『まゝに』といふ意味ですから、神ながらの道とは、『神のまゝの道』
『神の御心のまゝの道』『神の御心の通りの道』などといふ意味であります。

前にもお話した如く、御代々の天皇様は、皇祖皇宗様の御遺訓の通りに、この日本を御統治遊ばされ、また、皇祖皇宗様の御遺訓の通りに、私達國民に御教へを垂れさせ給ひます。この天皇様の御道が皇道であることは、前にお話しました。ところで、皇祖皇宗様は神であらせられます。その神たる皇祖皇宗の御遺訓通り、御心の通りに行はせらるゝ道です。すから、神のまゝの道、神の御心のまゝの道、即ち神ながらの道といふのであります。そしてこれを略して神道といひます。ゆゑに皇道も神ながらの道(神道)も同じことなのであります。天皇様といふ方から見れば皇道であり、神様といふ方から見れば神ながらの道(神道)なのであります。

第四、祖先崇拜

わが天皇様は、かくの如く皇祖皇宗様の御遺訓、即ち神の御心そのままを、永遠に御尊重になり、御奉體になつて、この日本を御治め遊ばされるのであり、國民も皇祖皇宗様の御遺訓を遵守奉體してゆくのであり

ます。かく神の御心、御遺訓をどこまでも遵守奉體するといふことは、つまり、祖先（皇祖皇宗様を初めとし奉り、國民すべての祖先は神です）を非常に尊び敬ふといふ心が強いといふことを現してゐます。

されば、わが國は、祖先崇拜の國であるといふのです。わが國ほど、祖先を崇拜し愛敬し、祖先の祭りを大切に行ふ國はないのであります。日本國民の總御本家であらせられる皇室におかせられて、その御祖先を御崇拜遊ばされ、御祖先の御遺訓を御守り遊ばされ、御祖先の御祭りを第一に遊ばされるのでありますから、國民もまた、皇室の御行ひ遊ばされる通りに、國家としての祖先即ち皇祖皇宗様を第一として、その他の

神社に御祭りしてある祖先神から、我が家の祖先まで大切にして、そのお祭りをし、いつまでも祖先の恩徳を忘れず、現在の我が家、現在の自分の在ることを感謝するのであります。

西洋の學者中には、祖先を祭るのは、死んだ祖先のたゞりがあるといけないとか、怨靈がこわいからとか、さういふ非愛情的な考へからするのであると説いたものもあります。かゝる考へは、忠孝の徳を全うしない個人主義、自分本位主義の人類の産物であります。親に孝行をせず、祖先をおろそかにして、自分だけが勝手に眞似をして生きたいといふのであつては、死んだ親に申しわけがなく、たゞりはありはしないか、怨

んでゐはしないかなど、いふ氣持も起ります。しかし忠孝を本とし、何ものよりも忠孝を重んじて生きる日本人には、親は敬ふもの、祖先は有難いものといふ心で一杯であります。ゆゑに祖先を祭るのは、敬愛、感謝の誠意から出づるのであります。

かく祖先を祭り、祖先を大切にするといふことは、即ち祖先の遺風を大切にするといふことになります。さればこそ、前にもお話しした如く、天皇様は皇祖皇宗様の御遺訓を、そのまゝ御承けつぎになつて、御統治を遊ばされ、國民もまた祖先の遺風（残し傳へ）を重んじます。私達國民の祖先の遺風の重なるものは、なんてせう、それは忠孝であります。かう

して、君民ともに、祖先を神として崇拜し、祖先の遺訓遺風を尊重してゆく。こゝに日本の國の萬邦無比なるわけがあります。祖先を忘れる、祖先のことはかまはぬといふのであつては、全くの個人主義、自分本位主義であつて、これでは本當の家なるものはないことになります。

第五、家

私達の家といふものは、昔から永くつゞいてゐるのであります。なぜ家がつゞいてゐるかといひますと、祖先のお祭りをするからつゞいてゐ

るのです。このわけは、西洋の家といふものと、日本の家といふものと比べて見ますと、よくわかります。

西洋の家といふものは、夫婦一代限りのものなのであります。それは西洋人の家庭は、夫婦本位で、夫婦が死んでしまへば、その家はそれでおしまひになるのです。なるほど、建物の家は残ります。また財産も残ります。その建物の家や財産を、その子が相続して、その建物の家について住むといふことはあります。しかし、それは建物の家や財産をついだだけで、その子は妻を貰ひ、また新しい意味の家を立てるのであります。かうして、子孫は、家を永くつゞけるといふことはなく、夫婦一

代限りで、その家が終つてしまふやうな意味になるのであります。

ところが、日本の家は、夫婦本位でなく、親子本位なのであります。つまり、祖先と子孫を重んずるのであります。現在の夫婦は、その夫婦だけの生活を目的としてゐるのでなく、祖先を祭り、子孫を繁榮させることをも目的してゐるのであります。ゆゑに、日本の家は夫婦一代限りのものでなくて、永久につゞくことゝなつてゐるのです。それで日本では、家督相続といふことがあります。家督を相続した者は家長即ち戸主です。家督相続といふのは、財産だけの相続ではありません。家全體の相続です。即ち、祖先を祭ることをも相続するのであります。西洋では

財産相續といふことがあるだけです。残された財産だけの相續です。

それで、日本の家といふものは過去(祖先)と、現在(生きてゐる私達)と、未來(子孫)と、この三世を一貫した家です。西洋の家は現在(生きてゐる家族)だけの家です。ゆゑに、私達が祖先を忘れ、祖先の祭りをしなかつたりすると、それは本當の家でないといふことになるのであります。

君に忠、親に孝である人は、必ず祖先をも忘れないでせう。不忠不孝の人に限つて、祖先を忘れ、現在の自分だけさへよければよいといふ浅墓な考へから、遂には、墮落して、悪い人になります。私達は祖先を大

切に思ひ、その祭りをすることを忘れてはなりません。

第六、血筋

わが國においては、なぜ、かくの如く、家を重んじ、祖先を敬ひ、そして祖先の残された教へを守るのでせうか。それは、血筋といふものを大切なこととするからであります。云ひかへれば、何事も、自然といふことを重んじるからであります。なぜかといへば、血筋といふものは、最も自然のものであります。いかにこれを變へようと思つても、變へることはできません。親は何んとしても親であり、子は何んとしても子で

あります。兄は何んとしても兄であり、妹は何んとしても妹であります。また、男は何んとしても男であり、女は何んとしても女であります。これが自然であつて、この自然を重んじるといふことは、つまり、血筋を重んじるといふことと同じであります。もし血筋を重んじないで、物事をしようとする、それは無理となり、非道となつて、とても良く永續きするものではありません。

尤も、親が本當の親でなく、子が本當の子でなかつたりしますと、そこに血筋が通つてゐませんから、よく永續きせず、争ひが起つたり、別れたりします。これと同じく、諸外國の皇帝國王といふものは、その國

民にとつて、血筋の上からの本家でもなく、家長でもありません。他の土地から来て、その國民を征服して、皇帝國王になつたとか、或は、國を治めるのに適當の人がないからといふので、他の國から、来て貰つて皇帝國王になつて貰つたとか、さういふ血筋の關係がなくて、皇帝國王になつたのであります。ゆゑに、政治が良くゆかぬと、その國民は革命を起して、その皇帝國王を廢したり、變へたりしますから、何千年の永い世界の歴史の上に、日本を除いては、一つも萬世一系の皇帝國王といふものがないのであります。

ところが、わが皇室は日本民族（即ち日本國民）の總本家であらせられ、

その皇室の御家長が、天皇様であらせられますから、つまり、天皇様は日本民族といふ一つの大きな家族の御家長であらせられます。云ひかへると、日本民族の御父であらせられます。ゆゑに、略して族父と申し上げてよろしい。或は日本民族の御親と申し上げてもよろしい。即ち、その御血筋の上から、自然に、天皇様は天皇様であらせられ、國民は國民なのであります。つまり、天皇様が天皇様であらせられ、國民が國民であるのは、親が親であり、子が子であり、男が男であり、女が女であるのと同じであります。何んともこれは變へることのできない絶対自然のことてあります。そこに何んの無理もありません。

第七、國體

皆さまは、よく國體といふ言葉をおきゝになりませう。國體觀念だとか、國體精神だとか、國體明徴だとかと、殊に近年は國體といふ言葉が用ひられます。

一體、國體とはどういふことでせうか。それは、國家成立の基本といふことです。つまり、國家の成り立ちの基といふことです。體といふ字は、本とか、土臺とかといふ意味をもつてゐます。それで、國體とは、國の成り立ちの本、土臺といふことであると云つてよろしい。

では、わが日本の國家の成り立ちの本は、何んでせうか。それは、萬世一系の日本民族の御親であらせらるゝ天皇様が、日本國の主體としてましますといふことであります。主體とは、御本尊といふ意味であり、また、日本の御所有主といふ意味でもあり、或ひは又た、日本の御主人様といふ意味でもあります。更に別の言葉でいへば、日本の國體とは、皇室中心といふことであると云つてもよろしい。萬世一系の御親たる天皇様・總御本家たる皇室が、日本の御主體、御中心としてましますこと、これが日本の國體なのであります。

日本國の善いこと、美しいこと即ち精華といふものは、この國體があ

るから、即ち萬世一系の天皇様がましますから、現れ發するのであります。もし、天皇様がましまさなかつたら、この日本國といふものはないのであります。なぜかといへば、わが國は、天皇様の御家即ち皇室が本となられて、その皇室が擴り、大きくなつて行つて、自らに成長發展して來た國であるからであります。

第八、皇室と臣民

わが日本といふ國は、皇室といふ御家が本元になられて、それから分家が出来、その分家にまた分家が出来て、だんくゝと家がふえて行つた

のが、わが日本國なのであります。これを一本の木にたとへて云ひますと、まんなかの幹が皇室であつて、その幹から生じてゐる多くの枝葉が國民であります。

尤も、今の日本人の中へは、他の民族が入つてゐます。元來、純粹の日本人のことを、大和民族といひます。大和民族といふのは、前述のやうに、皇室から分れ分れて生じた民族であります。この大和民族の他に大昔、支那や朝鮮から歸化した民族や、又は、熊襲族とか、蝦夷族とかといふ異民族も混つてゐます。かく、大和民族といふ皇室を本とする民族の中へ、他の民族が入つて來てゐるのですが、これは、私達の一家

にたとへて云ひますと、お嫁さんや養子が入つて來たやうなものであります。大和民族といふ大きな家へ、他から養子養女が來たのであつて、それがために大和民族といふ家には、少しも變りはありません。歸化した民族は、みんな大和民族に化せられてしまつてゐるのですから、つまりは皇室を本とする大和民族一つになつてしまつてゐるのです。

ですから、日本民族といへば、即ち大和民族のこと、大和民族といへば、即ち日本民族のことになつてゐます。『私の家は熊襲族から出たのである』といふ人もなく、『私は支那から歸化した者の子孫である』と思つたり、云つたりする人は、今日では一人もありません。みんな大和民

族に化せられてしまつてゐます。大和民族に化せられてゐるといふことは、大和民族に血が混つてしまひ、精神も全く大和民族になつてしまつたといふことです。

尤も今日の日本には、新しい國民として朝鮮人や臺灣人がゐます。これらの人々は、まだ大和民族に化せられてしまつてはゐません。あの人は朝鮮の人である、あの人は臺灣の人であると、みんなはつきりと區別され、その精神も大和民族たる日本人とは、大に異なるものがあります。しかし、これらの新しい國民も、これから先、何百年とたつてゆけば、だん／＼と大和民族に化せられてしまふのであります。

さういふわけですから、いつまでたつても、大和民族一つになつてしまひ、その大和民族が、即ち日本國民でありますから、その本元の皇室はいつまでたつても、大和民族の御本家であり、日本國民の御親であり、日本國の御中心、御本幹であります。こゝに日本國の、萬邦無比であるわけがあるのであります。

以上の如き次第ですから、わが國は君民同祖の國であるといひます。君(皇室)も、民(國民)も、その大本においては、同じ祖先であるといふことです。かくて皇室は自らに君であらせられ、民は自らに臣民であるのであります。自らといふのは血筋の關係から云へます。これを私達の

家について例へてみますと、親は自らに親であり、子は自らに子であります。兄も姉も自らに兄であり姉であり、弟も妹も自らに弟であり妹であります。『私はお前の親になるぞよ』と云つて、血の關係もないのに親になつたのでは、それは無理の親であり、自らでなく、作爲の親であります。子もまたこの通りで、親たり子たるのは、血の上から、自らにさうなつてゐるのであります。わが皇室と國民との關係は、血の上から自らに、天皇様であらせられ、皇族様は皇族様であらせられ、臣民は臣民なのであります。血の上から、祖先の關係から、君は君であり、臣は臣であるといふ、これほど自然で、無理がなく、道理に合つたことはあ

りません。もし、力づくで、おどかしたりして親となつたのでは、眞の親ではありません。また、この人を親にしておいたら都合がよいといふので親にしたのでは、眞の親ではありません。従つて、その親子の間には、眞の愛情がわくわけはありません。世にはよく義理の親とか、義理の姉妹とかいふのがあります。かういふ間柄には、とかく争ひが起り、別れ話などが生じます。諸外國の皇帝と國民との間柄は、丁度この義理の親子のやうなものであります。ですから、皇帝國王は、眞に國民のことを知らず、自分本位の態度を取るために、國民はそれに不平不満を感じ、遂にはその皇帝國王を廢するやうなことゝなるのであります。諸外國に

おいては、かうなるのは、まことにやむを得ぬことであります。即ち、君民同祖でなく、従つて皇帝國王は血の上から、祖先の關係から、自らに皇帝國王でないからであります。

世界において、血の上から、祖先の關係から、自らに天皇様であらせらるゝのは、わが天皇様だけであります、さればこそ、萬世一系であり、天壤無窮に天皇様は、この日本國を知ろしめす(御統治遊ばさる)のであります。

第九、日本の女性は何んとしても日本の女性

以上のやうに見て來ますと、わが日本は、實に世界一の國であることがわかります。世界一ですから、萬邦無比であります。即ち、天然自然の立場に立つて、君は君、臣は臣の道をつくしてゆく、それゆゑに、萬世一系の皇室が、天壤無窮(天地とともに)に御榮え遊ばされ、國民もまた萬世一系であつて、天壤無窮に臣としての道をつんで、皇室に忠をつくし奉り、かくて、日本國は、天壤無窮に榮えるのであります。かゝる國は、他に絶對になく、かゝる國民も、他に絶對にないのであります。即ち、他に絶對にない君主たる天皇様がましますので、日本は世界一であり、日本國民も世界一なのであります。既に日本國民が世界一ですから

その國民中の女性も、また世界一であることは申すまでもありません。わが日本の女性が、その世界一である性質を、ますますよく發揮するには、ますます日本の女性としての自然を重んじ、その自然に副ふて、修養し、努力し、生活してゆくことであります。

日本の女性(女子、婦人、女など)云つても同じ)は、たゞの女性でなく、日本の女性であります。英國の女性でなく、米國の女性でなく、露國の女性でもありません。日本人たる女性であります。これが自然であつて、この血筋からの自然は、何んとしても變へることはできません。ゆゑに、日本の女性は、日本の女性としての眞價を磨き、輝かすことに

つとめるのが、自然であつて、さうしてこそ、本當に生き得るのであります。もし、日本人たることを忘れて、米國式にならうとか、露國式にならうとか、獨逸式にならうとかとしたならば、それは天然自然に反した考へであつて、非常な無理と非道とができて、結局は、自分の身も心も、墮落させ、破滅させることゝなります。

また、日本の女性は、即ち日本の女性でありまして、斷じて男性ではありません。女と生れたことは、天然自然であります。女性に生れながら、女性らしからぬ行ひをしたり、女性らしからぬことを考へたり、女性らしからぬことを言つたりするのは、天然自然に反します。天然自然

の生れついた立場に立つて、即ち女性としての立場に立つて、その生れついたまゝに、修養をし、努力をし、生活をしてゆくので、本當に立派になり得、本當に役に立つ人になり得、本當に幸福に生き得るのであります。

かくて、日本の女性は、他のどこの國の女性でもなく、日本の女性であり、男性ではなく、女性であることを、よく自覺する、即ち天然自然の生れついた立場に立つて、よく生きてゆくことを考へることによつて日本の女性としての道が、頗る明かに分るのであります。

第十、日本女性の道の根本

日本女性の道は何か。それは、前にお話した皇道であります、神ながらの道であります。皇道も神ながらの道も同じですから、以下、皇道と申します。これを具體的にいへば、教育勅語を奉體すること、これが日本女性の道であります。ゆゑに、根本においては、日本の男も女も、同じ道を行ふものであります。道はたゞ一つであります。

教育勅語の御教へ、即ち皇道の御教へを詮じつめるならば、天壤無窮の皇運を扶翼し奉ることにあります。これを云ひかへれば、忠を行ふこ

とにあります。皇運扶翼は即ち忠なのであります。このことは後に説明
します。教育勅語に、

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕力忠良ノ臣民タル
ノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

と仰せられてゐます。天壤無窮とは、前にもお話した如く、天地ととも
に窮りがないといふことです。壤とは地といふことです。天地とともに
限りがないといふこと、永遠に限りのないことです。皇運とは、天皇様
皇室の御盛運といふことです。皇室の御盛んなる御運勢は、天地とともに
限りがないのであります。扶翼とは、一口にいへば、御助けし奉るこ

とであります。ゆゑに、皇運扶翼とは、皇室の御運が御盛んであるやう
に一生懸命になつて御助けし奉ることとあります。

されば、日本國民の目的は、皇運扶翼といふことにあり、随つて、い
ふまでもなく、日本女性の目的も、皇運扶翼にあります。そして、皇運
を扶翼し奉るのは、即ち忠であります。皇運を扶翼し奉らず、皇運を害
するやうな行ひは、不忠であります。よつて、つまるところ、日本國民
の目的、絶対に行ふべき道は忠であり、同じく日本女性の行ふべき道も
忠であります。日本女性にして、忠に外れた行ひをすれば、それは日本
女性の精神を忘れたもので、形のみ日本女性で、眞の日本女性であり

ません。

第十一、愛が本

元來、忠といふことは、どこから出るか。それは、血筋の上から湧き上る感情であります。利害の打算や、損得の勘定から湧くものではありません。利害や損得の勘定から出るのは、西洋式の權利といふものです。かうしなければ損になるといふので、權利を主張します。かうして貰へば得になるからといふので、權利を唱へます。さういふことは、みな西洋から出た思想であります。もとく西洋では、前にお話したやうに、

君主と國民とは血のつきがありません。その上に、君主は國民を征服して君主になつたり、他國から迎へられて君主になつたりしました。ゆゑに、國民の間に愛といふ感情がすくなくないのであります。だから、どうしても損得利害といふことを土臺にして、國のすべてのことをきめねばなりません。それで君主の權利はこれだけ、國民の權利はこれだけといふやうに、法律づくめで權利をきめるのであります。考へれば、まことに水臭い、殺風景なことてあります。損得利害から權利をきめるのですから、錢勘定が本であり、物質(財産)が本です。錢勘定のためには、君主は國民を絞る、國民は君主に抵抗する。そしてお互に得をしたい、權

利を大きくしたい、自由になりたいとする。まことに殺風景で、愛情味に乏しく、濫みがありません。

考へて御覽なさい。皆さまの一家の中で、こんな風でしたら、果して愉快に生活ができますか。父も母も子も、みんな錢勘定を本にして、權利を主張したらどうですか。お母さんが病氣をした、入院せねばならぬがお金がない。そこで働いてゐる娘に、借金の證文を書いて、お金を借りる。利子は幾らくで、必ず何日までには元利金を拂ひますと云つてお金を借りて入院する。かういふやうにするのが、權利の作用(はた)であります。これで入院するお母さんは氣持がよいてせうか。お金を貸した

娘さんも氣持がよいてせうか。これで私達人間の生活は幸福でせうか。西洋の權利本位の生活といふものは、ざつと以上のやうなものであります。

日本の國は、君民同祖で、みんな大和民族といふ血つゞきです。國といふものが一つの家なのです。ゆゑに國のことを國家と書くのであります。御上も下も、血つゞきですから、國の本、人の生活の基は、愛といふ感情であります。損得利害の錢勘定を本などにはしてゐません。しよと云つてもできるものでありません。濫い愛を本にしてゐる、随つて權利を本にせずして徳を本にしてゐるのであります。國の成り立ちがさう

ですから、天皇様と國民との間は、愛の關係、徳の關係となり、親子の間も、愛の關係、徳の關係となつてゐます。天皇様は國民の御親として自らに、國民を子として愛せられ、徳をもつて治ろしめします。これを昔から、天皇様の愛民と申し上げ、天皇様の徳治と申し上げてゐます。國民も自らに、天皇様を御親と仰ぎ、皇室を總御本家と尊び、忠といふ徳をもつて、ひたすらに御奉仕するのであります。

尤も、日本は、今日では、憲法といふ一番本元になる法律もあり、その外、あらゆる法律があつて、ちやんと權利も義務もきめられてあります。けれども、もと／＼憲法も法律も、すべては、天皇様が御許しにな

つて出來たものであります。いひかへれば、天皇様の徳、即ち君徳によつて賜はつたものであります。何しろ、國家といふものは複雑であり、國民もますます／＼多くなります。それで、ちやんと法律をきめておかないと、治まりがつきません。それで天皇様が、國民の權利をおきめ下さつたもの、それが法律であります。ゆゑに、本は、みんな天皇様の徳から出たことであります。つまりは徳が本、愛が本であつて、西洋とは全くその本を異にするのであります。

かく愛といふ徳が本ですから、私達の家においても、一家の者は、錢勘定を本にしてゐません。愛の徳を本にして、親に孝といふことを第一

にし、親は子のためにはどんな犠牲でも拂ひ、子は親のためにどんな苦みでもするといふ心で一杯であります。

この愛の徳で、日本國家のすべてのことを行ふのが、私達國民の行ふべき道であります。きめられた法律はある、けれども、その法律の本となつてゐる愛の徳を重んじ、皇室には忠義、親には孝行、主人には忠實、友人には信義を重んじるといふことにならねばなりません。かうすれば法律をも守ることゝなるのであります。

第十二、教育勅語

日本國民日本女性の道の根本は、忠であることは、前述の通りです。では、女性として忠を行ふには、どうすればよいでせうか。

それは、一口にいへば、教育勅語の御教へを、よく守り、よく行ふこととてあります。教育勅語に、

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博
愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公
益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公
ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

と御教へ遊ばされてゐます。即ち、父母に孝より、義勇公に奉ずるまで

のことをよく行ふのが忠であります。皇運扶翼であります。たゞ同じく忠を行ふといふも、男と女とは、おのづからその行ふ趣を異にします。男女共に道は一つであります。その歩み方に、おのづから異なるものがあります。これ、女は女としての天然自然の然らしむる所であつて、もし女性が、男性と同じ歩み方をしようとするならば、そこに、不自然無理が生じ、かへつて忠にならぬやうな結果ともなります。

前述の如く、わが國民は、皇運扶翼（即ち忠）を本とします。すべての行ひは、忠に歸してこそ、本當の行ひとなるのであります。されば、教育勅語に仰せられてゐる如く、親に孝行するもの、兄弟仲よくするもの

夫婦圓滿に和するもの、朋友互に信じ合ふもの、恭儉に自分の身を保つもの、博愛を行ふもの、更に學問や仕事を習ひ行ふもの、智能の啓發と徳器の成就につとめるもの、公益をなし、世務を開くもの、國憲國法を守るもの、義勇奉公國家のために生命を捧げたりするもの、みな皇運を扶翼し奉ることになるのであります。即ち忠を行ふことになるのであります。

第十三、天 職

では、教育勅語の御教へをよく行ひ、以て、日本女性としての忠をつ

くし奉るには、いかにせばよいでせうか。

先づ第一には、天然自然といふことを重んじることとあります。言葉をかへていへば、神ながらであることです。このことは前にお話しておきました。神ながらとは、神の御心のまゝといふことで、つまりは、天然自然のまゝといふことになります。日本國民であり、女性であることは、神ながらです。天然自然です。ゆゑに、日本女性であるといふことを第一に重んじ、日本女性としての天職を全うすることにとめねばなりません。

天職とは、天然自然なる職務といふことであります。男性と女性とは同じく人でありますから、共通したる天職もあります。けれども、男性には男性としての天職があり、女性には女性としての天職が大にあります。日本女性の天職の最重大なることは、良き子女(むすこ)を生み、良き子女を育て上げることとあります。言ひかへれば皇國にお役に立つ人、忠の精神に富んだ人となるやうに、家庭における教育を怠らぬことが、何よりも必要であります。

云ふまでもなく、子女の教育は、女性たる母だけの責任ではありません。廣く云へば家庭(殊に父)、學校、社會、國家等の責任であります。しかし、これらの中にあつて、最初より直接に教養の任に當るものは父

母、とりわけ母であります。もし母が子女の養育について、だらしがなければ、その子女は決してよい感化を受けません。賢母によつて、良き子女が生じるといはねばなりません。女性たる母が、忠の精神を缺き、國家社會を念はぬやうな言行をして、子女に對する時、その子女は、しらずしらずのうち、さういふ非國民的精神を養はれ、皇國のお役に立たざるのみか、害をなすやうな人物になるかも知れません。私は、今日の若き女性の方達に、切に希望します。皆さまが、將來母になられたならば、女性の第一の天職は、良き子女を生み育てることである。忠の精神に富み、皇國のお役に立つ人物に仕上げることであるといふことを、

よく自覺されて、實行せられんことを。そして、必ず教育勅語を、恰も佛教の熱心なる信者がお經を讀む如く、基督教の信者が讚美歌を歌ふ如く、常に家庭において、これを捧讀し、これを中心にして、家庭生活を營まれんことを切望します。

宗教は、佛教でも、基督教でも、又たその他の宗派神道(天理教や金光教など)でもよろしい。すべて宗教を信じるといふことは、非常によいことであります。しかし、教育勅語は、宗教以上の宗教であります。かりそめにも日本人である以上は、これを奉體せねばなりません。教育勅語のみでなく、天皇様の御詔勅は、絶對のもので、これを奉體せざるものは、非國

民であり、不忠の臣民であります。宗教は、信じようとも、信じなくとも、その人々の自由であります。けれども、天皇様の御教へ、即ち御詔勅は、日本人の悉くが、絶対に信仰し、奉體せねばなりません。皆さまが、たゞの女性ではなく、日本の女性である理由は、實にこゝにあるのであります。

第十四、結 婚

日本女性の天職の最重要事は、日本女性として立派になり、そして日本の母として、立派なる子女を作ることであるとすれば、その配偶者(夫)

とその家庭とを、よく選擇する必要があります。自分一人は、よき母となり、よき子女を作らうとしても、父たる夫が、その反對の言行をしたり、その家庭全體が、その反對の空氣の中にあるやうでは、決してよい結果を生みません。ゆゑに、皆さまが、將來結婚せらるゝ場合には、先づ夫たるべき人物と、その家庭とを、よく調べ、よく擇ぶことが大切であります。

先づ第一には、夫たるべき人の思想が堅實であることを望むべきであります。不健全なる思想をいただき、不忠の精神、非國家的精神を有するが如き人は、これを避くべきであります。

第二には、その夫たるべき人の家庭全體の堅實なることを望むべきであります。わが國は、前にもお話した如く、家なるものを重んじます。ゆゑに、嫁してゆくべき家そのものが不健全であつてはなりません。

第三には、その夫たるべき人の身體強健にして、悪い遺傳がなく、血筋のよいことを望まねばなりません。

なほ、こまかい點をあげるならば、いろいろと要望すべきことがあります。以上は、日本女性が、妻として母として立ち、その天職を全うする上に、必要なことであります。

こゝにおいてか、私は皆さまが、輕卒なる結婚、單なる出來心からの結婚、誤りたる結婚などをなさらぬことを、心から切望するものであります。

第十五、愛と平和

徳富蘇峰先生の云つてゐらるゝ如く、わが國の神代からの歴史を見ますと、わが國は男と女との同心戮力(心を同じうし力を合はせる)によつて成長發達して來た國であります。男性と女性との共稼ぎで成長して來てゐる國であります。元來日本は、女子を虐待したり、低能扱ひしたり、その位置を低く見たりしたる國ではありません。文學博士井上哲次郎先生の云つてゐら

る、如く、わが國において、女子を軽く見るやうになつたのは、支那の思想學問や、佛教の思想のためであつたと思はれます。もつとも今日では佛教は決して女子を軽く扱つたり、蔑んで見たりしてはゐません。佛教は、古くから日本に入つて来て、今日の佛教は、いはゆる日本化したる佛教であります。ゆゑに今日の佛教は、女子をも重く見て、女子の進歩向上につとめつゝあります。しかし大昔は、佛教や支那の思想のために、女子が軽く見られるやうになつたのは否むことができないやうであります。

元來は、わが國においては、女子といふものは、大に活動し、大に國家のため、社會のためにつくしたのであります。男子と共に、或場合には男子以上にといつてもよい位に、立派なる活動をしたのであります。しかも、かゝる立派なる大活動をしつゝも、男子と異なりたる自然の性質を發揮したのであります。そこに日本女性の世界一である所以があります。

わが國の神代の傳説によりますと、この日本の國土をお生みになつたのは、伊弉諾尊様と伊弉册尊様のお二方であります。國土を生むなどといふことはできないと、誰もお考へてせうが、これは、一つの思想として傳へられたことなのであります。生むといふことは、自然のことと

あります。作るといへば人爲的ですが、生むことは、人爲でなく自然であります。ゆゑに、この國土を生まれたといふことは、右の二神の御力によつて、この國土が頗る立派に開けたといふ意味なのであります。立派に開けたと共に、その開け方に無理がない、不自然なことがない、二神は、他人の領土を征服してお取りになつたとか、人々をひどい目に合はせて、御自分達の利益や幸福のみを目的にして、この國土をお開きになつたのではない。即ち無理や、不自然のことは少しもなく、またなさらずに、國土をお開きになられた。この意味を言葉に現はして、國をお生みになつたと、大昔から云つてゐるのであります。

さてこの二神は、御夫婦であらせられます。伊弉諾尊様は男の神様、伊弉册尊様は女の神様であらせられます。このお二方の神様が、御夫婦として、御一心御同體となられて、國生みのために御努力遊ばされたのであります。即ち國の起りからして、わが國は、男女共稼ぎで、決して女子の力を無視してゐません。もし、わが國において、もと／＼から女子を輕視したならば、國生みなど、いふ重大なことに、女の力を混り入れるやうなことはありません。

次ぎに、わが國の最も尊貴なる神様は、皇祖天照大御神様であらせられます。天照大御神様は、伊弉諾尊様の御子にまします。この大御

神様は、皆さまもよく御承知の如く、女神であらせられます。至高至上
至貴至尊の神様が、女神であらせらるゝといふことは、わが國が大昔か
らして、決して女性を軽んじてゐない、寧ろ大に重んじたといふことを
最も明白に現はしたものであります。

なぜ、天照大御神様が、神々の中で一番尊くあらせらるゝか。それは
わが皇室の御祖先様であると共に、その御徳が、まことに廣大無邊(限り
なく大)であらせられたからであります。されば古い昔の本(日本書紀といふ本)に、

この大御神様を、

光華明彩、六合の内に照徹る

と申し上げてゐます。光華は光りであります。御徳の輝きであります。
その御徳の光りが、明彩(美しく)であつて、六合(世界中)に照り徹ると
いふのであります。その御徳の輝きの廣大無邊なることは、恰も太陽の
如しとも申し上げべきでありますから、大御神様を日神とも申し上げて
ゐる次第であります。

この大御神様は、愛を本とせらるゝ平和の女神であらせられます。事
實について、このことを一々お話ししてゐては、長くなりますから、こゝ
には略しますが、一口にいへば愛と平和の女神であられます。こゝに女
性の神様であらせらるゝ御特長が現はれてゐます。女性の女性たる所以

は、愛情に濃やかなことであります。この愛情によつて、人間社會を平和にすることが、女性の大きな使命であります。わが國の至高の神様、皇祖であらせらるゝ神様が、かく愛と平和の神様であらせらるゝことは日本が、愛と平和とを大本として立てる國である事を現はしてゐます。そして愛と平和といふことは、女子に備はつてゐる自然の性質であります。この女子としての自然を、ますますよく磨いて、人間社會を愛と平和の美しい世界にすることが、女子の最大なる使命であるといはねばなりません。

しかし、大御神様は、一面には、凛としたる御勇氣をお持ち遊ばされ

てゐました。これについても、事實をあげてお話してゐますと、長くなりますから略しますが、愛と平和の御徳と共に、勇武の御徳をお持ち遊ばされたのであります。こゝがまことに有難いところであります。勇武とか、勇氣とか、勇敢とか、さういふ力があつてこそ、本當の愛、本當の平和、本當の正義を貫き通し、發揮することができるのであります。なぜならば、世の中には、悪い人、曲れる人、邪まな人が澤山あります。さういふ者共は、愛や平和や正義に反した行ひをします。暴力をもつてさういふ悪い行動をとります。かゝる無法者、悪者は、いくら云ひきかしてもきかぬ時、又た、先方から攻めて來た時には、こちらでは、それ

を懲らし、防ぐ力が必要であります。さうでない、愛も平和も正義も無法者、悪者のために、ふみにじられ、世界には悪いこと、曲れること、邪まなことが平氣で行はれるやうになります。かうなつては、愛も平和も、また正義も行はれません。ゆゑに、わが天照大御神様は、愛と平和と正義とを主とし給ふ女神様であらせられますが、その愛と平和と正義とを實行なさるために、勇武の御徳をもお持ち遊ばされてゐるのであります。

このことも、今日の日本女性には、よく知つておくべきであります。女性の使命は、愛と平和とを實現させることにありますが、それがために

は、強い意志、勇ましい元氣をもたねばならぬのであります。殊に今日のやうな時代には、女性の強い意志と勇ましい元氣とが最も必要であります。いざ戦争といつても、敵の飛行機が私達の國土に、頭上に、飛來します。そして男女の區別はありません、誰の頭上へでも、爆弾や毒瓦斯を投下するでせう。かゝる時、女性の勇氣が必要であります。國防は女性の力にも大に俟つものがあります。日本人の半數たる女性に、勇氣、元氣、士氣がなかつたら、國防の力は半減されます。國防上だけではありません。日常の大小の事は、女性の力に俟つこと頗る大であります。女性の勇氣に勵まされて、男性はよりよき大勇氣を發揮することができ

るのであります。

第十六、勇 氣

女は弱いもの、勇氣のないものといふのは、他國の女性はいざ知らず日本の女性としては間違ひであります。慎ましいうちに凛としたところがあり、柔いうちに剛いところがあり、床しいうちに元氣がある、優しいうちに強さがある。即ち、愛と平和とを主としつゝも、そのうちには勇武の氣性を、ちゃんともつてゐるといふのが日本の本性であります。國史の中から、考へついたものを舉げて見ませう。

先づ第一に思ひ出さるゝは天鈿女命様であります。この女性の神様はまことに朗かでしかも勇氣ある方でした。天照大御神様が天岩窟に御入りになつたとき、愉快なる神樂を舞ふて、多くの神々を笑はしめ、大御神様が御出ましになるきつかけを作られたのは、實にこの神でした。またこの神は、皇孫御降臨の時、御供をされました。その途中に、異様な顔をした神が現はれたので、御供の神々は、聊か恐れをなして、その異様な神に向つて、何者であるかを尋ねるものがありました。その時、この天鈿女命は、一人進み出で、その神と話をされて、案内のために出て來られた神であることが分つたのであります。

第二には、倭姫命様であります。命は第十一代垂仁天皇様の皇女で、日本武尊様の叔母様であります。日本武尊様が御東征の時、命は、尊に天叢雲劍を御渡しになつて、慎みて怠ることなかれと御教へになられ、大に勵まされたのであります。女性の御方ではあらせられますが、かゝることは勇氣のある方でなければ出来ないことであります。それにそのお言葉「慎みて怠るなかれ」といふことは、萬世に通じて、何人にも必要な、日常守るべき訓言であります。

第三は、弟橘姫命様であります。姫は日本武尊様の御妃であらせられます。尊が御東征の途中、海上風波が烈しく、船が沈没しかけました。

その時、御夫たる尊の御使命の重大なることをよくお知りになり、こゝで尊が海の藻屑となられては、國家の一大事であると思はれた命は、海が穏かになり、尊が御無事に渡航せられることを祈られて、自ら海中に御身を投じて死なれたのであります。まことに悲壯極まつたことであります。かゝる犠牲は、眞に勇氣がなければ出来ません。

第四は、神功皇后様であります。皇后様は第十四代仲哀天皇様の皇后様であらせられ、三韓を御征伐遊ばされたる國史上最も著明なる女性中の御勇ましき御方であらせられました。

第五は、伊企儼の妻大葉子であります。第二十九代欽明天皇様の御時

新羅征伐があつて、伊企儼は出征しました。その時、妻の大葉子は、敵地において、凜然たる勇氣と貞節とを發揮したのであります。

第六は、上毛野形名の妻であります。第三十四代舒明天皇様の御時、上毛野形名は蝦夷平定に出陣しました。その時、形名の妻は、皇軍の不利なるを慨し、勇氣と智略とを發揮して皇軍の勝利に歸せしめました。

第七は、和氣廣蟲であります。この女性は和氣清麿公の御姉であられ第四十八代稱徳天皇様の御時、清麿公を助けて、道鏡の非望を挫き、わが國體の尊嚴を護つたのであります。

第八は、靜御前であります。源頼朝の武威にも屈しなかつたその氣概ある節操は、勇氣がなくては發揮できません。

第九は、巴御前であります。夫の木曾義仲について戰場に出で、武勇まれなる女性として謠はれましたが、その節操もまた大に勝れてゐたと稱せられます。

第十は、板額であります。板額は城の助國の娘で、兄の長茂が亂を起して捕はれ、その甥が兵を起しました。この時板額はこれに加はり、大に戦ひました。彼女は力が強く、弓の名人でした。しかし遂に捕はれて鎌倉に送られ、將軍頼家の前に引出されましたが、すこしも恐れる色になかつたので、人々はその剛膽に感じました。それで許されて、將軍の

家來淺井義遠の妻となり、貞淑な夫人として人々から賞せられました。

第十一は、伊賀局であります。局は新田義貞公の部將たる篠塚伊賀の娘であります。豪勇を以て聞えた女性です。楠木正行公の戦死後、第九十七代後村上天皇様が、賊軍を御避けになるため御遷幸の時、局はこれに随つてゆきました。途中、橋が落ちてゐて通れません、賊軍は後から追つて来る、侍従の人々が困つてゐますと、局はそばに生えてゐた松の大樹を折つて橋をかけ、以て鹵簿（天皇様の御行列）を御無事に御通過出来るやうにしました。後、楠木正儀の妻となりました。巴、板額、伊賀局、これを日本三勇婦といひますが、忠といふ點から見、この伊賀局が勇婦中の第一であります。

この他、春日局、浅岡（政）、野村望東尼など、勇氣膽力を以て聞えた女性は、數へますとまだく澤山あります。殊にこゝに特にお話しておきたいのは、日本人で、外國へ留學生として渡つたのは、女性が最初であるといふことです。女性もそれは少女達三人なのであります。即ち、第三十代敏達天皇様の十三年の事で、まだ佛教が日本に入つて来て間もない頃であります。この時、司馬達等の娘島（尼さんとなつて善信といふ）、夜菩の娘豊（尼さんとなつて禪藏といふ）、錦織壺の娘石（尼さんとなつて惠善といふ）の三人の少女は、十五歳の善信を頭に、百濟（鮮朝）

に留學し、三年の修行をして、日本に歸つて來たのであります。實に勇健なること、云はねばなりません。

右等の女性の方々は、いづれも日本女性の勇氣を現はされたものであります。たと弱きものは女性である、勇氣なきものは女性であるなど、いふのは、日本女性には當て嵌りません。

第十七、貞操

思ふに、日本の女性の美德は、多々あります。その中において、最高の美德とされるものは、貞操觀念の堅固なることとあります。貞操は女

子だけが、妻だけが、守るべきものでありません。男も、夫も守るべきものであります。吉屋信子女史の小説に『良人の貞操』といふのがあります。但ししかし、男にまして、女性には貞操が大切であります。ふしだらな娘さんが、貞操を重んじなかつたために、悲惨なる運命に陥つた例は世間に餘りにも多いのであります。それがために、自殺さへする女性もあり、墮落し切つて、惡の華となり、或は闇に咲く花となつた女性も頗る多いのであります。これでは、日本國民、日本女性の使命たる道、即ち忠を行はず、反對に不忠不義の女性となつたもので、まことに祖先に相濟まず、親に相濟まず、そのみならばまだしも、畏くも天皇様に

申しわけのない次第であります。

多くの罪惡、多くの悲惨は、女性の貞操輕視から起ります。このことを思へば、女性は如何なる誘惑、如何なる困難に堪へても、その貞操を堅固に守らねばなりません。まして妻とならば、その家の血筋の純正を保つ上からも、貞操は絶対に守らねばなりません。

女性にして、その貞操を守り得ない者は、つまりは心が強くなく、勇氣に乏しいからであります。巧みなる男性の誘惑や、脅迫や、或は虚榮などから、遂にその貞操を守り得ず、捨てゝしまふのであります。貞操は死守すべきもの。例へば靜御前の如くでありたいのであります。眞に

強く、眞に勇氣あらば、貞操を守り得るのであります。

貞操の輕視は、風俗を紊り、社會を頹廢させ、國家を危くするに至ります。これを思へば貞操は、眞に強くなり、眞に勇氣を出して、これを死守し、男性のふしだらと横暴とを、撃滅させねばなりません。これ、剛健にして堅實なる皇國日本を作るの基となるのであります。

第十八、職 業（労働）

女子の天職は、家庭にのみありとせられたのは、過去のことであります。今や女子は、あらゆる方面の職業に従事しつゝあります。女子が職

業方面に大なる進出をなしつゝある原因は、第一に經濟の關係でありま
す。女子も家庭にあつて、消費のみをしてゐては、一家が成り立たない。
進んで職業にたづさはり、収入の途を講じ、一家の生計を助けるといふ
ことが、第一の原因であります。第二には女子教育の進歩が原因であり
ます。女子の教育が進み、あらゆる職業仕事にたづさはつて、それを仕
遂げるだけの智能が備はつたからであります。

女子が外に出て働くことは、間違つてゐるといふ人もあります。即ち
女子は、家庭生活をするのがその本分であるから、外に出て職業に従事
するのはいけないといふのです。しかし、いけないにせよ、よいにせよ、

女子が外に出て働かねばならぬのが、今日の實際であり、また、わが國
の主要なる工業の中には、男子よりも女子でなければならぬ仕事があり
ます。そこで、さういふ工業なり仕事なりが、ますます發展するにつれ
て、一家の生計を保つといふ經濟の關係と相俟つて、女子が外に出て働
くことは、ますます多くなります。ゆゑに、この實際の上から、職業に
従事する女子が、眞にその職業の根本的使命を知り、且つ、自分の立場
を知り、神聖なる日本の職業婦人、労働婦人として立つことを望まざる
を得ないのであります。

先づ第一に、職業、労働に従事する女子は、その職業、労働の種類如

何を問はず、原則（おほもと）としては、その職業、労働は、みな皇國の御爲であるといふ自覺を眞にもつことが、必要であります。この自覺の下に、まごころをもつて、正しく働くところに、職業の神聖、労働の神聖があるのであります。労働（職業）は神聖なりといふ格言は、有名であつて、これは西洋から出た語でありますが、眞に労働の神聖、職業の神聖はわが日本においてのみ、云ひ得るのであります。これは私の持論（私がかくとり守つてゐる説）であります。かういへば日本以外の國々における職業、労働、仕事は、眞に神聖でないのかと問ふ人がありませう。實はさうなのです。他の國々の神聖は、利害の關係や、法律の上から見て、正しくさへあれ

ば、それで神聖なのであります。ところが、わが國においては、そんな淺薄なものではなく、眞に神聖なのであります。このわけをお話しませう。どうかよく注意してお読み下さい。

よの中はたかきいやしきほどほどに

身を盡すこそつとめなりけれ

これ、明治天皇様が、明治三十七年に『述懐』といふ御題にて御詠み遊ばされし御製であります。又た、同じ年に『民』と題されて、

ほどく／＼にこゝろをつくす國民の

ちからぞやがてわが力なる

と御詠み遊ばされてゐます。明治三十八年の御製の中に『船』と云ふ御題にて、

數あまたあるが中にも國にして

つくりし船を見るぞうれしき

いそしみてますく船はつくらなむ

海をめぐらす國のかために

と御詠み遊ばされ、明治四十年に『鑛山』てふ御題にて、

ひらかずばいかで光のあらはれむ

こがね花さく山はありとも

との御製があり、明治四十二年に『祝言』といふ御題にて、

なりはひをたのしむ民のよろこびは

やがてもおのがよろこびにして

と御歌ひ遊ばされ、明治四十三年に『工』と題されて、

外國におとらぬものを造るまで

たくみの業にはげめもろ人

と御詠み遊ばされてゐます。この御製こそは、特に工業に従事せる者の寸時も忘るべからざる御製でありまして、實に、日本工業人に對する御聖訓であります。更に明治四十三年の御製中に『をりにふれて』と題さ

れて、

みちく／＼につとめいそしむ國民の

身をすくよかにあらせてしがな

と御詠み遊ばされ、明治四十五年に『をりにふれて』てふ御題にて

國民の業にいそしむ世の中を

見るにまされる樂はなし

と御歌ひ遊ばされてゐます。

又た、大正天皇様の御製には、

年々にわが日の本の榮ゆくも

いそしむ民のあればなりけり

と仰せられてゐます。

右等の御製は、いづれも、わが國民の仕事、職業、職務、労働、生産、

工業等を御詠み遊ばされしものであつて、まことに、有り難くも尊い大

御心の御表現であり、且つ、拳々服膺すべき御聖訓であります。

大正天皇様が、大正十二年十一月十日に御換發(御發布)遊ばされし『國

民精神作興に關する詔書』には、

入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ

と宣ふてゐられます。これは、『内においてはつゝしみ深く節儉を守り、

勤めはげんで仕事をして生産をし』との御訓へてあります。

更に、今上陛下が、昭和八年三月二十七日に御渙發の『國際聯盟離脱に關する詔書』には、

衆庶各其ノ業務ニ淬勵シ

と宣ふておられます。これは、『衆庶即ち國民のすべてが、めい／＼その業務にはげみつとめて』との御訓へてあります。

かくの如く、天皇様は、その御詔や、その御製において、仕事・業務・労働等を、おろそかにするな、よく勵めと、御教訓遊ばされてゐるのであります。

天皇様は『仕事によく勵め』と御教訓下されてゐらるゝのみならず、謹掲し奉つれる御製を捧讀すれば、直に何人も、かたぢけなく感ずる如く、『分に應じて心をつくす即ち仕事にはげむ國民の力こそやがて朕の力である』『仕事に樂む國民の喜びは、やがて朕の喜びである』『務めいそしむ國民が、健康であつてくれよ』『國民が業務にはげむのを見るのが、朕には一番の樂みである』『日本の榮えるのは、國民の力である』など、さへ仰せられてゐるのであります。

かゝる、有り難き大御心を拜し奉つて、誰か感泣せぬものがありませうぞ。私達は力一杯、精一杯、働かねばならぬことを、眞に痛感し、眞

に實行せざるを得ないのであります。

勞働は神聖なりといふ。このことは、わが日本においてこそ、眞理であります。何んとならば、勞働（廣い意味、即ち職業仕事）はわが國において、やがて、天皇様への御奉公であるからであります。我等は、この説を、わが國の本質の上より、原理的の見地より云ふのであります。まことに、勞働も、天皇様の御爲めであります。言葉をかへていへば、皇國の爲めであり、世界を善化し、美化し、眞化する所の皇道の爲めであります。

西洋人の考へは、歸する所『自分』であります。自分の幸福、利益を

本としての考へが、西洋思想、西洋人の精神であります。ゆゑに自分より出で、自分に歸るのであります。されば前にもお話した如く、自分本位主義、個人主義であります。されば、その家も、その國も、錢勘定を本にして、利害關係を本にして出來てゐます。錢勘定、利害關係を本にしますから、常に争ひが起ります。そこで權利といふことをやかましくいつて、自分自分の權利を定め、その權利を他人に侵されぬやうにするのであります。それで、西洋人のいふ勞働（職業）の神聖は、この錢勘定利害關係の上に立つたものであります。いひかへれば、自分の權利を正しく保ち、他人の權利を侵さず、自分の利益を正しく守り、他人の利益

を無法に侵さず働くこと、それが労働神聖なりといふのであります。いくら神聖と云つても、錢勘定を本としての神聖で、眞の神聖とはいへません。

ところが、日本人のみは、天皇様を本として生きる國民であります。天皇様を本として生きてゐるといふことは、錢勘定とか、利害とかといふやうなことを本として生きてゐるのではない。愛と和と、さういふ美しい、眞に神聖なる徳を本として生きてゐる國民であるといふ事です。一家もかくの如く、一國もかくの如しです。血筋といふ天然自然の關係から、親子の愛情をもつて、國民全體が生きてゐるのでありますから、本と

なるものは、愛と和の徳であります。ゆゑに、日本人の考へは、天皇様より出で、天皇様に歸るのであります。天皇様は日本人の歸一するところであり、日本人の安心立命（身を安んじ天命を全くして心に憂ふる所なし）のところであります。ゆゑに、歐米人の働きは、歸する所、自分の爲め即ち利己、我慾であり、日本人の働きは、歸する所、天皇様の御爲め即ち皇國の爲め、皇道の爲めであります。それは利己でなく、奉仕であります。

皇道は、世界を眞善美化するの道で、言葉をかへていへば、世界を徳化して、大平和の世界を實現せしめようとする道であります。かかる至尊至貴の天皇様、及びその天皇様の御樹て遊ばされし皇道の爲めに働く

といふことは、これほど神聖なことはないのであります。されば、労働は神聖なりとは眞に、わが日本においてのみ、原理的に、本質的に、云ひ得るのであります。思ふに労働神聖、勤勉主義はまことに神代から、わが國における思想であり、主義であります。木村鷹太郎先生曰く、されば天照大御神のごときも、種々の御田を有し給ひ、又自ら織殿に入つて機を織り給ひしやうなことは『勤勉』の神徳として實に優かききものである。また勇猛絶倫を以て聞ゆる須佐之男尊すらも種々の御田を有し玉ひ、駒は其の耕作に使用せられたものゝやうである。吾人臣民は皆勤勉主義を此の神々に學ぶべきである。

と。然り、畏くも、皇祖たり國祖たる天照大御神様さへも、機を織り給ふの労働を遊ばされ、勤勉の御徳を我等國民に御示しになつてゐらるゝのであります。神代の昔より、かく、皇祖であらせられ、國祖であらせらるゝ絶對至上至尊の大御神様が、労働は神聖なり、勤勉を主義とせよと云ふことを、支那や西洋の聖人哲人のやうに、長々とした理窟など仰せられず、否、一つも理窟は仰せられずして、實際をもつて、御示しになり、御教へ遊ばされてゐるのであります。

以上のことをよく知つて、職業に従事することは、日本國民として最も必要であつて、このことを女性たる皆さまに、特にお話しておく次第

であります。

第十九、日本女性の健在を祈る

女性が職業に従事するのは、特別の境遇や特殊の才能のある人は別として、大抵は、若いうちだけのことであつて、後には結婚して家庭の主婦となるのが、普通であり、また、さうあつてこそ、本當の女性なのであります。それで、普通の女性の眞の使命は、妻となり、母となつて、良き家庭、良き子女を作り、以て、天皇様に忠をつくし奉ることにあります。即ち、日本女性の忠とは、良き家庭、良き子女を作ることであり

ます。これが、日常における女性として誰にでもできる忠であります。女性の無常識や、不健全なために、男性までも迷惑をし、墮落をすることは、頗る多いのであります。官吏の收賄事件なども、もし主婦が健全にして立派なる精神をもつてゐたならば、起らないですんだであらうと思はるゝものもあります。夫の知らぬ間に、妻が賄賂を取つたとか、妻が虚榮心が強いので、夫は金に困つて悪いことをしたとか、女性の不健全なる考へや行ひのために、しらずしらずのうちに、男性が間違つた道に踏み入り、家庭を破壊し、一身を沈淪させてしまつた例は、あまりにも多いのであります。

女は國をも傾けるといひます。實に不健全なる女性の力は、國家を衰亡させ、健全なる女性の力は、國家を興隆させます。わが日本女性は、その歴史の示すやうに、男性と健全なる共稼ぎをして、今日の日本を作り出して來たのであります。今日の日本女性は、更に祖先に恥ぢざる行ひをして、ますます皇國日本の隆盛に力をつくさねばなりません。つまりところは、日本女性の道は、即ち日本國民の道であつて、皇運を扶翼し奉ること、忠をつくし奉ることにあります。切に、日本女性の健在を祈つてやみません。

日本女性の道終

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月五日發行

日本女性の道
定價 三十五錢



不許複製

著者 小倉 鏗 爾

發行者 中 藤 正 三

東京市神田區錦町二丁目二番地

印刷者 西村 由 太郎

東京市神田區三崎町二丁目九番地

印刷所 西村 印刷 所

東京市神田區三崎町二丁目九番地

發行所

東京市神田區錦町一ノ二(二松ビル)
振替口座東京一三六五三五番

錦 正 社
電話 神田 四一四一〇番

發賣所

東京市神田區錦町一丁目二番地
振替口座東京三四〇九番

二松堂書店

著生先爾鏗倉小

刊新	刊未	版重	刊新	版重	版重
<p>清水狂風先生著 新しい記憶法の秘訣と頭の働かせ方</p> <p>送定料價</p> <p>錦一圓三十 正十社十 刊錢錢</p>	<p>小林清治先生著 常識の泉 世渡心得讀本</p> <p>送定料價</p> <p>錦一圓五十 正十社四十 刊錢錢</p>	<p>日本國體辭典</p> <p>刊昭菊 行和判 十約三千二百 の三年二百 豫中頁 定に頁</p>	<p>平易なる 日本國體の話</p> <p>(徳富蘇峰先生序)</p> <p>送定料價</p> <p>文三政六十 社十 刊錢錢</p>	<p>我國體と皇道</p> <p>送定料價</p> <p>ダイヤモンド社 三六十五 刊錢錢</p>	<p>平易なる 日本精神解説</p> <p>(東京高等師範學校茗溪會選定圖書)</p> <p>送定料價</p> <p>二八松九十 堂五 刊錢錢</p>

終



定價三十五錢

錦正社發行・二松堂發賣